

みなさんは、「やってはいけない」と思っているつもりやってしまうことはありませんか？こちらもちょうど捨てるがたく、結局両方が中途半端になってしまう事はありませんか？(Ⅱ列王5章)ナアマンという将軍がツァラト(ハンセン氏病)を患います。ナアマンは自分のしもべからの情報で預言者エリシャに病気を治してくれるようにと言います。するとエリシャは来ませず「ヨルダン川に7度浸かれ」と言うのです。ナアマンには考えられない事でした。会にも来ず、しかも、アマナ川やパルパル川ならまだしもドブ川のようなヨルダン川に浸かれと伝言されて非常に怒りました。自分たちもこのような事がないですか？自分がある事に真剣に取り組んでいる時、助けを求めた人からバカバカしいほど簡単な答えが返ってきたらどうですか？腹が立ちませんか？ナアマンもそうでした。川に7度浸かって命も脅かすツァラトが治るならこんなバカな簡単な事はない！無意味だ！と感情的になり、腹を立てて実行しようとしませんでした。しかし、冷静になってしもべのアドバイスを実行しツァラトが癒されたのです。私たちはどうでしょう？私たちは感情的になるとプライドが邪魔をして冷静にアドバイスをきけません(正しい判断ができません)。(マタイ6:19～24)私たちの心は、どこにありますか？そしてその心は明るいですか？そして私たちの目は見えていて、いつも正しい判断ができていますか？私たちの心が暗くなり正しい判断ができなくなる理由は①**過去は目を暗くするからです**。私たちは過去の事柄にとらわれてしまいます。過去の経験上、「自分の知っている方法が良いのでは」と思ってしまうのです。神さまが私たちに「こうした方がいいよ」と言われているのに、私たちは自分たちの都合のいいように「その方法も良いけどちょっと…」と、少し変えて受け取ってしまいます。私たちは過去の経験に目を暗くされてしまいます。本来なら良い方法が見えるのに、それができないのにやらないのです。ナアマンも「ヨルダン川に浸かれ」と言われた時「何でヨルダン川なんだ？パルパルやアマナがあるじゃないか」と全否定ではなく一部を変えて実行しようとしていました。そうすると次には②**目の見えるところに(宝を)置きたくなるのです**。神さまは「宝は天に積め」と言われているのに、目を暗くされる・目が見えなくなってくると、不安になってきて、自分の見える範囲に宝を置こうとします。例えば礼拝スタイルや祈り方…目に見える形で「こうした方がいい」と決めつけ形式的にもって行ってしまいます。人生もそうです。過去を否定したくないので目に見えるところ・過去に経験したことに頼ります。しかしその過去の経験から今の自分があるのです。過去の経験が素晴らしいものであるなら後ろを振り返らず先も考えずにそのまま進めばいいでしょう。しかし私たちは過去に良くない経験を積んでいるから、過去を振り返り未来を見るのです。そして③**目先に走るのです**。エリシャの弟子のゲハジがそうでした。自分の主人の言うことに逆らったらどうなるのか…普通に考えれば、どうなるのか分かるので逆らいません。しかし、ゲハジは目先に走ってしまって後に何が起るのかも考えられなくなっていました。そして、何もかも知っているエリシャに嘘をついて最後にはツァラトに犯されてしまいます(Ⅱ列王5:20～27)。ゲハジは主人のエリシャにも自分の欲にも仕えてしまったのです。一時の感情…ゲハジはお金に、ナアマンはプライドと言う目先のものに走ってしまいました。目先のものはお金やプライドだけではありません。私たちが今まで経験してきた過去もです。人生は“人生に影響のない大したこともない小さいこと”に大きく狂わされるのです。お金もプライドも過去の経験も必要なことです。だから正しく管理すれば害を受けないのです。しかしこれらを正しく管理しないと人生を狂わされます。例えば包丁も上手に使いえば素晴らしい料理が作れますが憎しみにかられて人に向ければ人殺しの道具です。私たちが使い方を誤ると、このようなことが色々なところで起こってしまうのです。当たり前だと思っていることが人生を狂わせるのです。だから神さまは私たちに「新しい概念を持ちなさい」と教えてくれるのです。それなのに私たちは今まで生きてきた保証・今の姿・成り立ちが過去によって・過去の経験が蓄積することで出来上がっているのです。この過去の経験を捨てるのが今までの自分を捨てることに思えて恐怖です。そんなに過去が大事ですか？過去はあくまでも土台であって大事なものではありません。私たちに与えられている将来と比べると取るに足らないものです。過去にとらわれると未来しかありません。「将来」は私たちを作りあげることができますが「未来」には、それはできません。神さまは日々私たちに新しいことをせよと言われます。私たちにとって変化は嫌なものです。自分が全否定された気持ちになるからです。しかし否定しているわけではありません。今までの道があったから新しい道が歩めるのです。ナアマンもそうです。「7度川に浸かれ」と言われた時、自分の人生も立場も全て否定されたと感じたのです。私たちはナアマンのように7度川につかることができるでしょうか？聖書で「7」は「完全に」、「水に浸かる」は「肉に死に新生される」という意味です。だから、ここで私たちは「完全に過去を捨て新しくされなさい」と語られています。副題に～過去の自分に死ぬますか～とあります。新しくなるなら古いもの(過去)は捨てなければいけません。「また、人は新しいぶどう酒を古い皮袋に入れるようなことはしません。そんなことをすれば、皮袋は裂けて、ぶどう酒が流れ出てしまい、皮袋もだめになってしまいます。新しいぶどう酒を新しい皮袋に入れれば、両方とも保ちます。」(マタイ9:17)と書かれています。古いまま新しい道は歩めません。また、「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」(Ⅱコリ5:17)とも書かれています。だから私たちは古いもの(過去)にとらわれてはいけません。神さまからのメッセージを受け取った時点で私たちは新しくされているのです。3つのポイントによって目を暗くされていませんか？見えていないのでどうでもいいことを手当たり次第にやって疲れて本当にしなければいけないことをやってない…そして得たいと思っていることが得られず絶望してしまう…そして行動を起こすことが嫌になる、と言う負のスパイラルに落ち込んでしまうのです。(ヨハネ10:7～15)

私たちには「良い羊飼いか」「悪い羊飼いか」が見分ける力があります。多くの情報の中から本当に必要な情報を見分けて得ることができるのです。しかし、目が暗くされていると、自分たちにとって良くない情報が聞きやすいことになってしまうのです。この聞きやすい悪い情報が自分の過去に基づいているからです。ですから、これからは、私たちの目・耳を神さまに向けて「自分のために語られている言葉」を受け取りましょう。自分たちのために語られているのにそれが私たちを悪くするはずがありません。(詩篇23篇)神さまは私たちに安らぎを与えるために、つまずいて転ばないように語りかけてくれています。過去にとらわれて目が見えなくして安らぎを見失ったりつまずいて転ばないようにしなくてはなりません。過去にとらわれていないか自分を見つめ直してください。でも人の評価ではありません。「あの人は自分のことをこういう風に思っている」と勘違いして人の目を気にして行動しているようでは、その時点で過去にとらわれた形式ばった行動を取っていることとなります。それでは何も変わりません。自分たちを評価できるのは私たちを創ってくださった神さまだけです。過去を大切に目を見て間違った評価を欲するのは終わりにして、自分たちを一番良く知り、唯一私たちを評価する権利をもたれる神さまの評価を得ていきましょう。(要約者：行司佳世)